

金光大神の信心から「世界真の平和」を考える

東京学生会OB（勝浦教会）辻井篤生

その考え方の基本

「天（あめ）が下の者はみな、神の氏子である。天が下に他人はない」

（金光教教典 理解Ⅱ 佐藤光治郎・12）

「人の身が大事か、わが身が大事か、人もわが身もみな人」（理解Ⅲ 神訓・2―33）

「信心する人は、十人の股はくぐつても、一人の肩は越すな」（理解Ⅱ 石田友助・11）

「たとえ人にたたかかれても、けつして人をたたいてはいけない。人に難儀をさせるな。よい心にならせてもらえばありがたいと思ひ、すれ違つた人でも拜んであげよ。できるだけ人を助けるようにせよ」（理解Ⅱ 大西秀・8）

「信心する人は、人に頭をたたかかれても、私の頭は痛みませんが、あなたの手は痛みませんか、という心になり、また、頭から小便をかけられても、ぬくい雨が降つてきたと思えばよい」

（理解Ⅰ 近藤藤守・61）

この教祖様のみ教えから、金光大神の信心は非戦・非暴力であり、力に対して力でやり

返したり、構えたりする考え方や行動は、決して私たち金光教人にはない。

「天下太平、諸国成就祈念、総氏子身上安全の幟染めて立て、日々祈念いたし」

（金光教教典 覚帳 12 | 14 | 3 明治元（一八六八）年九月二十四日）

このお知らせが示された年の正月、徳川慶喜が鳥羽伏見の戦いで敗れたため、教祖のもとに日頃からよく参拝していた庭瀬藩主板倉勝弘の、本家に当たる備中松山藩の板倉勝静が朝敵の汚名を受けた。板倉勝静は、当時徳川幕府の老中首座である。この時の朝命により、新政府側についた岡山藩の池田茂政が、西隣にあるこの庭瀬藩にも兵を進めてきた。板挟みとなり判断に窮した板倉勝弘は、教祖のもとに急使を遣わし、教祖から「兵を出さず、門を開き、玄関で主人が出迎えよ。朝敵ではない、恐れ入ります、と申せ。妻は裏門に出しておれ」とのご理解を受けて、結果朝敵の汚名を免れることができた。このエピソードからも、教祖様には、力に対して力でやり返したり、構えたりする考え方がないことは明白である。

そして、このお知らせの「総氏子身上安全」の「総」が極めて重要である。つまり、日本だけではなく、韓国、北朝鮮も、ロシア、ウクライナも、アメリカ人も、中国人も、キリス

ト教徒もイスラム教徒も、自民党も共産党も、そのすべての人たち、国家、民族、人種、宗教、思想信条を越えたすべての一人ひとりが助からなければならぬのである。

金光大神の信心の平和観

これを基本にさらに金光大神様の信心の平和観を三つの視点から考え、世界真の平和とは何かを考えてみたい。

一・人間観

トマス・ホッブス 「人間は互いに対して狼である」

「不信」「恐怖」 対立

教祖金光大神様 「人間は互いに対して大神である」

「信頼」「安心」 協調

一七世紀のイングラントの哲学者トマス・ホッブスは、現在の安全保障の根本の考え方を説いた人であると考えている。このホッブスの人間観を一言で言い表している言葉が「人間は互いに対して狼である」、つまり、人間の本質は動物と変わらず、いや動物以上に他者

を押しつけ、殺してでも生きようとする人間像である。

だから人間世界の普通の状態では、人々の争い事が絶えない。この争いをやめさせるには個々人の暴力を遙かに超えた国家の暴力装置（軍隊）が必要だとした。そして「抑止力」という考え方もここから来ている。抑止力とは、相手を常に敵とみなし、もし攻撃してきたら倍返しにして叩きのめすぞと脅し、相手に手を出させない状態に置く力である。つまりは相手を「脅迫」と「恐怖」で支配するというのが抑止力。このホップスの人間観は、他者に対する不信任と恐怖心に貫かれている。

それに対し、金光大神様の人間観は、「人間は互いに対して大きな神様の意味の大神である」、人間は互いに神様の氏子であり、「人が人を助けるのが人間である」との教えどおり人間像である。「自分の命は、自分の幸せのためだけのものではなくて、難儀な人たちみんなのための命なのだ」と教え、神心を持って互いに助け合い、世を救ってほしいと願っている。ゆえに、対立する敵を想定した「脅し」と「恐怖」の「暴力の均衡」の上に成り立っている平和は真の平和とは言えず、金光大神の人間観からは「抑止力」という考え方はありえない。「不信」と「恐怖」で成り立っている平和と、「信頼」と「安心」で成り立っている平和のどちらの平和がよいか、これも明らかであろう。

二、人間の難儀性、無礼性の自覚

しかし、平和問題の難しいところは、戦争は何も悪意を持つて人を殺したいからするのではなく、自らの国や民族、集団の正当性を主張し、自分たちを守り、間違っている現状を正そうとして始めるからである。そこには正義感、同胞愛、理想といった善意に支えられ、自らの正義を持ち出し、その心の底に「間違っているあなたのためを思つて正してあげる」という使命感があるから始末が悪い。

これが宗教の問題となると、自分にとつて正しい信仰は、自分だけでなく人類一般にとつて正しい信仰のはずと考え、「場合によつては敵の肉体を滅ぼしてでも、その魂を救うことが敵のためでもある」、「敵を愛すればこそ、敵の魂をその犯した罪から救つてあげる必要がある」との論理で殺人が正当化されてしまう。この自ら正しいと信じていることが、相手を責め傷つけてしまうこともあるということ、個々のところで正しくても全体としては悪になつたり、善意が悪となつてしまうという根本的な矛盾を抱える人間の難儀性、根源的な無礼性を持つている人間であるからこそ、よかれと思うことが、人をも殺してしまふところまで行きかねない。

そうした、人間は難儀な氏子だからこそ、根源的な無礼性を持つているからこそ、教祖様は、人間のもう一つの本質である「人が人を助けるのが人間である」という「神の氏子」

としての人間観を示されたのではなからうか。普通は、この「難儀な氏子」がおかげを受けて助かり、「神の氏子」となって神の働きを現すという信心の構図ではあるが、ここで注意が必要なのは、助かっている「神の氏子」が助かっている「難儀な氏子」を助けるという構図になった場合、先に指摘した「間違っているあなたのための思つて正してあげる」というあり方になってしまい、それが争いの種になりかねないということである。そうではなくて、人間は難儀な氏子であり、不完全であるからこそ、互いに足らない所を足し合ひ、神の氏子として助け合う働きを現してほしいと願われたのだと思う。この根本的な矛盾を抱える人間の難儀性、根源的な無礼性の自覚の中にお詫びと改まりの意識が生まれ、その意識こそが、正しいことが真に正しく発動され、人間を手段化しない普遍的な正義の実現へと繋がっていくのではないか。

三、過去、現在、未来からの眼差し

私たちはただ現在だけを生きているのではなくて、過去、現在、未来へと続く命を生きている。もし私たちが先の世界大戦の時に生きていたらどう行動しただろうかと考えてみる。そして過去の人々の声なき声を聞いてみる。自分が過去を見ている立場ではなく、もし過去の人々が現代のわれわれを見た場合にどう見えるだろうか。見ている自分ではな

く、見られている立場の自分を意識する。

そしてさらにやがて生まれてくるであろう未来の方々のために、今をどう生きればよいか。もし、対立する世界が本気で全面戦争を行えば人類は滅亡しかない。人類が生き延びるためには、戦争をせず、そして戦争のための武器を処分していく方向性しかない。未来の人たちが実際に生き延びていたとしたら、世界中が憲法第九条を持つていることになっているはずである。日本は世界に先駆けて憲法第九条を持ち、戦争と武器を放棄した。未来の人たちはこれを称えているであろう。

世界真の平和とは

以上の考えから、平和を一言で言うならば、「分け隔てなく、分かち合う」ことであり、世界真の平和とは、

- 一・遠くにある理想や目的ではなく、人間生活の前提であり、手段である。と同時に平和は希有なるものであり、深く感謝しつつ、時々刻々と創り上げていくものであり、
- 二・ある特定の人や集団の平和ではなく、天地全体と過去、現在、未来のすべての一人ひとりの平和であり、

三・表層的に平和を唱えるのではなく、私たち人間の心の奥に巣くう暴力性を自覚し、常に

自らを正当化しようとする無礼を詫び、改まり、他者の痛みをわが痛みと感じつつ願ひ、行動するところにある。

現実には厳しい。しかし、世界のどの国にも、どの宗教にも、同じく平和を求め、世界真の平和への祈りを共有してくれる人たちがいる。その人たちと手を取り合っていくために、私たち信奉者は日々、世界真の平和を真剣に祈り、金光大神の信心を世界に伝えていくことが必要だと思う。